

## 私のきもの → Mode et mode : 私のきもの

東京：實業之日本社，1946—

伊東衣服研究所創設者で日本のクチュールデザイナーの草分けでもある伊東茂平は、終戦直後で食糧も配給制の時代で、まして衣料不足の敗戦国でスタイルブックを出版することに抵抗があった。しかし、当時實業之日本社にいた内山基の強い依頼により監修者および著者として、1946（昭和21）年5月に「私のきもの」の創刊号を発行した。表紙は外人モデルの顔のアップ、裏表紙は表紙のバックスタイルで英文タイトル「My Clothes」とした斬新なもので、美しく装う行為から遠ざかっていた女性たちに、大きな反響で迎えられた。實業之日本社は創刊号を買い求める幾重もの人の列に取り囲まれ、当時の同社の記録では創刊号は10万部以上、次号は25万部売れたと記されている。

茂平は、「洋服は国際服だ。これからの日本人は何の疑いもなく、昔から着続けてきた錯覚さえ持って、洋服国民になるだろう。我々の着るもの、すなわち『きもの』なのに、わざわざ洋服と、洋をつけることはない。少なくなるに違いない和服

は和服と呼んで区別する方が良い」とタイトルを「私のきもの」と命名した。洋裁学校が隆盛を極め、生活をエンジョイする風潮が次第に強くなってきたのも同時期で、茂平は戦争で閉鎖していた研究所とデザイナー活動を再開し、「婦人画報」「装苑」「スタイル」にも作品を発表した。

1947年9月、内山基は實業之日本社を辞め独立した後、實業之日本社の社長と茂平の強い要望により、「私のきもの」を引き受け、1953年秋まで東和社より出版した。その後、時代の流れにより海外に進出することが多くなり、和服の本と誤解されることもあったため1961年新春号より「Mode et mode」と誌名変更した。創刊当初B4判の大型判が1953年からB5判になっていたが、茂平の作品こそ大型化する必要があるとA4判へと変え、一層内容の充実を図った。

創刊当初「私のきもの」はスタイル画だけで構成され、職業としてのモデルはまだ確立されていなかったため、1950年頃から茂平の妻である孝や、伊東衣服研究所の関係者たちがモデルとして登場していた。1953年、クリスチャン・ディオールの作品とともにモデルたちが来日し、東京・名古屋・京都・大阪にてショーを行なった。一行の滞在中、衣装責任者として同行した安東武男は、当時のショーの様子、デザインやモデルたちのことを翌年春号に掲載している。また、表紙にはディオールの作

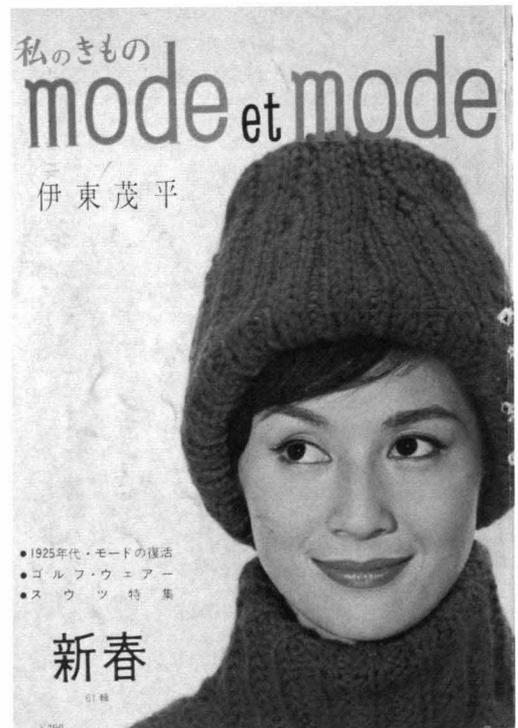


「私のきもの」1946年冬の号表紙

品を使用した。この頃には日本でもファッションモデルが誕生しており、1957年、NDK（日本デザイナー協会）の招きで来日したピエール・カルダンは、松本弘子を自分の作品のモデルに抜擢し、フランスから同行したモデルのエレーヌとともに日本各地のショーや技術講習に起用した。後に松本弘子はカルダンの専属モデルとして渡仏し、パリ・コレクションにも登場、日本人初の国際モデルとして活躍した。秋号にはカルダンの来日に関する座談会を企画。茂平、伊東達也、安東武男などが出席し、その誌面からはファッションに対する熱気と強い興味深さがうかがえる。

1970年あたりを境に婦人服に対する女性たちの考えが変わり、今までの実用の範疇から抜け出して、服をファッションの目でとらえるようになった。ファッションが本来の“流行”という意味においてファッションらしい様相を呈していたのがこの頃である。パンタロンが市民権を得、ミニかロングかと論争され、シーズンごとに女性たちは流行を一変させた。不況の時でも伝統を内容的に維持し、質的な面で下げることをしなかった本誌の部数はその頃から急激に上昇をはじめ、広告の量も7、8年前に比べると7、8倍に増加した。1973年、150号記念を迎え、時を同じくして、その情報源を広くニューヨークやミラノ、ローマに求めるようになった。それまでコレクション写真を通信社から購入していたが、オートクチュール会場に直接特派員を派遣して特写するようになり、生き生きした誌面作りが可能になった。また、1976年前後からはパリ・プレタポルテコレクションが大きく脚光を浴び、同年秋冬プレタポルテコレクションからパリで直接取材した。その後、ミラノ、ニューヨーク・コレクションと拡大し、ニューヨーク取材は大石尚に全面的に協力を得、内容を充実させた。

本誌は当初、季刊誌だったが、1961年9月からパリ・コレクションの特集号を刊行し、翌年からパリ・コレクション特集号が2回加わった。1985年1月号より別冊パリ・プレタポルテコレクション号を含め年8回刊となる。しかし1990年よりパリ・オートクチュールコレクション号が春夏と秋冬の2回、パリ・ミラノ・プレタポルテコレクションが春夏と秋冬の2回の刊行となり、今も変わらない。  
(尾崎恵子)



「Mode et mode」1961年新春号表紙